

東日本大震災の時、東北の人々が我慢強く並んだことが、世界で驚異の目で見られた。東北人は我慢強いとニュースになった。あの整然とした姿に私も感服した。その姿は日本人にも当てはまると考えた人も多いと思う。しかし、気質だと説明できるだろうか。そこには重要な背景がある。「避難者に最後まで食料を配る」ことへの信頼と平等である。手にできない人がいるとき、「無いので、はい、終わり」とはならない。無ければ何とかみんなに手に渡るように、例えば役所は、



する。だからこそ、人は安心して並べるのである。

もしそうでなければどうだろうか。若い人は知らないだろうが、1970年代、石油ショックではトイレトペーパーや洗剤が無くなる噂になり、人々は先を争って買った。私もその映像を覚えている。日本人は整然と並ぶのではなかったのだろうか。そうではないことは明らかである。待っても手に入らないとわかっている時、人は変わる。

私たちは文化の違いを「日本人だから」、「外国人だから」と民族性でよく説明する。

だが、私は反対である。見るべきは人ではなく、社会である。生まれながらにして日本人なのではなく、その社会の中で生きることで価値観を身につける。そして、社会は様々な仕組みから成り立っている。もし、日本が早い者勝ちでしか物が手に入らない社会なら、日本人でも並ばないのだ。日々の制度があり生活が成り立ち、その上で日本人として生きていける。このことは、民族性がいかに曖昧であるかを物語っている。民族性を語る時、その背景や社会の仕組みを知ることが大切だ。民族性って意外といい加減ですよ！

文：県立広島大学 上水流久彦 講師

イラスト：県立広島大学 ロナルド・スチュワート 准教授

2014(平成26)年 広報あきたかた 5月号掲載